様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月　1 日現在

機関番号：37302
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2011
課題番号：22730525
研究課題名（和文）　広汎性発達障害における情動機能の発達と障害

研究課題名（英文）　Development and Disability on Emotional Function of Pervasive Developmental Disorder

研究代表者　中村　真樹（NAKAMURA MAKI）
長崎純心大学・人文学部・講師
研究者番号：80531780

研究成果の概要（和文）：
広汎性発達障害における情動機能の発達を促進する支援方法として心理劇に着目し、（１）数量的データによる検討、（２）発達段階による検討、（３）事例的検討の３つの視点から検討を行った。その結果、（１）広汎性発達障害の特定の表情とディレクターの特定の支援に関連があるのではなく、対象者の個別性に応じてディレクターが支援の在り方を変えていること、（２）児童と青年の間には情動表出の在り方に違いが見られ、それは心理劇の構造と生活体験及び療育経験の違いによるものであること、（３）情動語の理解や使用に困難を示す事例については、情動の類似性についてディレクターが理解を促すことが有効であることの３点が示された。

研究成果の概要（英文）：
This research focused on psycho-drama as a way to facilitate emotional function of pervasive developmental disorder. Results were discussed from perspective of(1)quantitative data analysis,(2)developmental stage,(3)case study .Results showed that (1) Director's support have no specific connection with the facial expression of participants and the support should be individualized to meet the needs of participants,(2)There are differences between the child and the adolescent in emotional expression and those differences seems to be closely linked to the structural characteristic of psycho-drama of age group and to the everyday-life experience and therapeutic experience of participants,(3)For participants who have difficulty in how to understand and how to use emotional word ,director's support which promote an understanding of similarity between more than one emotion is effective .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育心理学
キーワード：発達障害、情動、自己、他者、心理劇、支援

１．研究開始当初の背景
広汎性発達障害については、対人的相互反応の発達に重症かつ広汎な障害があり、言語的または非言語的なコミュニケーション能

力の障害や常同的な行動・興味・活動の存在を伴うものであることが明らかにされている。近年では、広汎性発達障害と自閉症スペクトラム障害をほぼ同義であるととらえ、彼らが円滑な社会生活を営むための支援に注目が集まっている。広汎性発達障害が対人関係構築において示す障害については、言語能力によって補完される部分があることを示す報告がある一方で、意識下における情動の働きに障害を持つことが報告されてきた。そのため、広汎性発達障害における情動機能の発達を支援することが重要であると考えられるようになってきた。本研究では、広汎性発達障害における情動機能の発達を促す支援として心理劇に着目し、ディレクターやスタッフによる効果的な支援方法について検討した。

２．研究の目的

（１）　数量的データによる検討

心理劇におけるディレクターの言語的支援、非言語的な支援と心理劇の主役（広汎性発達障害）における情動表出の関連について時系列分析により検討することを目的とした。本研究では、心理劇におけるシェアリング場面を対象とした。

（２）　発達段階による比較

心理劇における情動表出の在り方について、児童と青年を比較し、発達段階に応じた支援方法について検討することを目的とした。

（３）　事例的検討

個別性に応じた情動機能の発達を促すことを目的として、事例的検討を行った。

３．研究の方法

（１）　調査協力機関

本研究は、Ａ県の社会福祉法人Ｂ園の協力のもとで行われた。Ｂ園は、知的障害児・者、広汎性発達障害児・者を対象とした事業を展開している。児童については、Ｂ園の児童デイサービスＣセンターの協力を得た。Ｃセンターは、児童期の広汎性発達障害を対象としてＳＳＴの視点を取り入れた療育活動を行っている。青年については、Ｂ園の複数の部門に協力を得た。

（２）　対象者

① 児童　児童デイサービスＣセンターの療育グループに所属している広汎性発達障害児 10 名を対象とした。

② 青年　Ｂ園に所属する広汎性発達障害者のうち、2 泊 3 日の社会適応訓練キャンプに参加した 10 名を対象とした。

（３）　グループの構造

児童、青年ともに社会的適応能力を伸ばすことを目的に種々の療育が実施された。児童については、月２回の頻度で療育が実施された。プログラム例を Table1 に示す。青年においては、社会科見学等も含む 2 泊 3 日のプログラムの中で心理劇が実施された。

Table1　療育プログラム（例）

時間	内容
10:00～	始まりの会 ・黙想・挨拶・出席確認 ・日付確認・天候確認
10：15～	心理劇 （ウォーミングアップ）
10：50～	心理劇（劇化）
11：30～	おやつ　自由遊び 保護者との情報交換
11：45～	終わりの会 ・インタビュー・挨拶

（４）　スタッフ

Ｂ園の職員及びボランティア（保育・教育・福祉・心理領域で専門職として従事している者及びこれらの領域を専攻している者）がスタッフとして参加した。

（５）　データの記録方法

2 台のデジタルビデオカメラにて記録を行った。1 台は心理劇場面全体を撮影し、もう 1 台は可動式で主役の表情を撮影した。

４．研究成果

（１）　数量的データによる検討

①　分析方法

心理劇のシェアリング場面を対象に時系列分析を行った。時系列分析は、筆者と大学院で心理学を専攻した研究協力者 2 名で行った。時系列分析を行うにあたり、広汎性発達障害については、情動表出として表情に着目し、「ポジティブ」、「ネガティブ」、「ニュートラル」に分類した。ディレクターの支援については、言語的支援について、「指示・介入」、「促し」、「見守り」の 3 カテゴリーを作成した。非言語的支援について、「注意喚起」、「指示・介入」、「繰り返し」、「質問・確認」、「傾聴」の 5 カテゴリーを作成した。

②　結果

広汎性発達障害におけるポジティブな情動表出と、前述したそれぞれのカテゴリーとの同時生起率を算出した結果、広汎性発達障害におけるポジティブな情動表出とディレクターによる特定の支援の間に関連は見られなかった。この理由としては、各対象者における表情の生起率に個人差があることや、対象者によってディレクターによる非言語的支援、言語的支援の生起率に違いが見られ

たことが考えられる。対象者におけるポジティブな情動表出とディレクターの発語の同時生起率の例を、Figure1とFigure2に示す。

数量的データによる検討から、広汎性発達障害の特定の表情とディレクターの特定の支援に関連があるのではなく、対象者の個別性に応じてディレクターが支援の在り方を変えていることが示された。また、対象者における表情表出の特徴を考慮して、情動表出や情動理解の側面を支援していく必要があることが示された。

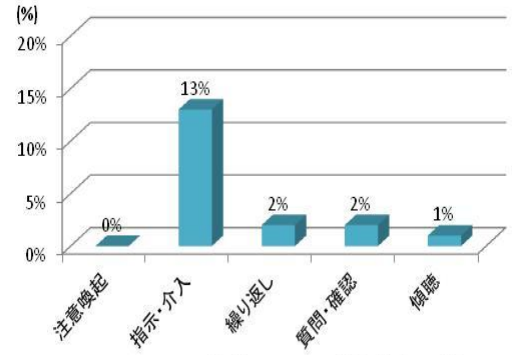

Figure1 シェアリングにおける A子の表情(ポジティブ)とディレクターの発語の同時生起率

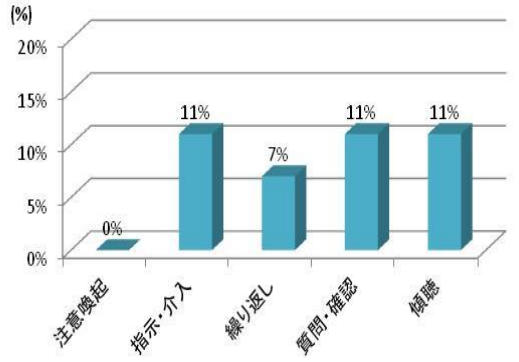

Figure2
B男の表情(ポジティブ)とディレクターの発語の同時生起率

（２）　発達段階による比較

児童と青年について、心理劇において表出される情動について比較した。その結果、児童と青年では表出される情動の多様性という点で大きな違いが見られたが、それは①児童と青年における心理劇の構造と②生活体験及び療育経験の違いが影響していると考えられた。

① 児童と青年における心理劇の構造

児童については、Table１に示すように心理劇が実施された。心理劇の目的は、「自分の気持ちを表現すること」、「他者の気持ちを推測すること」の 2 点であった。心理劇は、標的情動を定め、標的情動を表現する内容を考えて劇化するという手順で実施された。標的情動は、ディレクターが事前に準備したものから児童が選択する形式がとられた。

一方、青年については、2 泊 3 日の社会適応訓練キャンプにおいて実施された心理劇を対象とした。心理劇のテーマは青年自身が希望したものであり、日常生活における悩みや過去の気にかかっている出来事等が劇化された。児童については、単一の情動が標的情動であったが、青年については劇化のテーマとの関連で複数の情動や入り混じった感情が表現されたため、児童と青年で表出される情動に違いが生じたと考えられる。

② 生活体験及び療育経験

今回対象となった青年については、高機能であるという点は共通しているが、Ｂ園の入所施設に在籍している者、Ｂ園が運営する事業所で勤務している者等生活の背景は様々であった。それぞれが、学校で友人とうまく付き合う事ができなかった経験や、職場の人間関係でトラブルを抱えた経験を有していた。さらに、家族との関係で自分の気持ちをうまく表現できない等の悩みを抱えている事例もあった。青年については、成長の過程で様々な情動を経験しており、心理劇を通して自己や他者の情動に向き合い、表現してきたと言える。

一方、児童については、心理劇の経験がまだ浅い児童や、思春期にさしかかり、人前で表現することへの抵抗が生じた児童が存在するなど、心理劇への積極性に個人差が見られた。また、心理劇において自らの体験を劇化することについて、より細やかな介入が必要であった。さらに、児童においては、人前で発表をして注目されるということが大きな意味があると考えられた。

児童期から青年期に向けて、心理劇が日常生活において生じた様々な情動体験に向き合い、自他の情動について理解する支援となり得ることが示された。

（３）　事例的検討

広汎性発達障害児を対象として行った「気持ちの理解」をテーマとした心理劇的ロールプレイングについて、情動理解と情動表出を促す具体的な支援について検討した。

その結果、情動表出の促進を支援するにあたっては、対象者の日常生活に関連の深い場面に焦点化することが有効であることが示された。心理劇的ロールプレイングでは、ポジティブな情動及びネガティブな情動をテーマとした劇において、テスト場面、教師と児童のやりとり等、学校に関する場面が劇化されることが多く見られた。療育グループの参加児童にとって、学校における様々な経験は具

体的にイメージしやすいものであるため、劇の主役にとって表現しやすく、観客にとっては標的情動を答えやすかったと考えられる。

情動語の理解と使用については、対象者の個人差が見られ、①情動体験を想起することが難しく、情動語を自発的に用いることが難しい事例、②情動の類似性について理解していない事例が見られた。

①、②それぞれについては、以下のような支援が有効であった。

① 情動体験を想起することが難しく、情動語を自発的に用いることが難しい事例

情動体験の想起が難しい児童に対しては、劇化における支援として、スタッフが情動に関連した出来事の選択肢を児童に与える方法が有効であった。選択肢は、対象となる児童が日常的に経験していると推測される場面を中心に提示することが有効であった。広汎性発達障害は自らの体験と情動語を結びつけることが難しいと考えられるが、適切な手がかりを与えることでそれが可能になることが示された。

② 情動の類似性について理解していない事例

情動の類似性について理解していない児童に対しては、ディレクターが標的情動に類似した情動語を意図的に用い、心理劇において表現された情動を説明する方法が有効であった。例えば、「寂しい」という気持ちが表現された心理劇においては、心理劇の主役が表現しようとした情動は「寂しい」であったが、「寂しい」気持ちは「悲しい」気持ちにも似ていることを指摘する等である。情動表出や情動理解を促進するために、情動の類似性や相違点について支援を行うことが有効であることが示された。

（4） 今後の展望

本研究では、広汎性発達障害における情動機能の発達支援として心理劇に着目し、具体的な支援方法について検討した。児童と青年の双方における支援について検討したことで、心理劇の生涯発達支援としての可能性が示された。広汎性発達障害における個別性に配慮しながら、発達段階に応じた心理劇の構造についてさらに理解を深め、様々な現場で適用の可能性を探ることが重要であろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①中村真樹、「広汎性発達障害児に対する情動機能の発達を目指した集団指導療育―対象児の特徴に応じた支援方法に関する時系列分析―」、児童教育支援センター年報第 6 号、査読無、2012、1-10

②中村真樹、「広汎性発達障害児への心理劇―情動表出と情動理解の促進に向けた集団指導療育―」、純心人文研究第 17 巻、査読無、2012、65-74

③中村真樹、「広汎性発達障害における情動表出を促進する支援－時系列分析による予備的検討－」、児童教育支援センター年報第 5 号、査読無、2011、23-32

〔学会発表〕（計３件）

①中村真樹、「広汎性発達障害児への心理劇の適用―情動体験の促進を目指した支援について―」、西日本心理劇学会、2012 年 2 月 19 日、福岡

② 中村真樹、「Support for Emotional Function in Children with Pervasive Developmental Disorder：Focus on Role of Therapist」、THE 12th EUROPEAN CONGRESS OF PSYCHOLOGY ISTANBUL、2011 年 7 月、ISTANBUL

③中村真樹、「広汎性発達障害における情動機能の活性化―心理劇による支援を通した検討―」、発達心理学会、2011 年 3 月 25 日、東京

〔その他〕ワークショップ

①高原朗子、井上久美子、中村真樹、「高機能広汎性発達障害者のための心理劇ワークショップ：心理劇実技及び講義」、2011 年 9 月 17 日、熊本

②高原朗子、井上久美子、中村真樹、「西日本心理劇学会ワークショップ：発達障害のための心理劇」、2011 年 2 月 18 日

６．研究組織

(1)研究代表者

中村　真樹（NAKAMURA MAKI）
長崎純心大学・人文学部・講師
研究者番号：80531780

(2)研究分担者

（　なし　）

(3)連携研究者

（　なし　）